

航西日記

卷之四

ヲ 7
3267
4



門 77
號 3367
卷 4

早稲田 大學 図書館
昭 33.5.31 受
藏 書



航西

日記卷之四

青淵漁夫

靄山樵者

同

佐野常民
圖書之記

慶應三丁卯年五月廿七日 西洋千八百六十
七年六月廿九日 晴。無

事

同廿八日 西洋六月 午後。ボワテブロンへ遊歩を

る。陪を。此日都児格シユルタン巴里へ。到着せ

り

同廿九日 西洋七月 晴。午後一時より。パレイドラン

デストリイにて。博覧會褒賞ある。因て。兼て

博覧會
褒賞

國帝より招待ありて。我公使も。國帝并各國。帝王。王子。后妃等と同じく。是を觀る。カシヨン等も陪從せり

千八百六十七年第七月一日。サレブリチエーのエンヂスト。ー宮におゐて。博覽會。褒賞の配分あり。宮中の大柱ある所にて。劇場の機敷のとく。造作。二万人余の人を容れ易うらむ。其中間。博覽會に出せる品物を。十種と分ち。ちる中。就て。重立するもの。標式を示さる。○帝坐。宮中の北邊にあり。其左右にこ

の禮式の爲。招請せる諸王子。公主等の爲。設け。帝坐の前。諸執政官。議政官。其他。貴官列立せり。デプロマチックの諸官。帝坐に對せる所。其機敷を設け。○第一時半頃。博覽會。品物を出せる。褒賞。預るべき人。各その品の種類によりて。區別せる地。座を占め。新定の特賞。預る人。帝坐に對して。列せり。○第一時四分三。國帝。及陪從の官人。次の如く。チエーロリ。宮より。出立。親衛。槍隊。の笛手。同。コロ子ル。槍隊。一。エスカドロ

ル。一ペロトン宛。縦隊にて押さう。王旗の槍隊。
其次ソナルテスアンペリアールブランセ
スマチルダの役官。及フランスナポレオン
ランセスエロナルダの役士。六馬は駕せる。第
一の車はハ。王妃は從へる。宮女兩人。宮殿の奉
行。王妃の側役。同第二車はハ。宮の侍女兩人。國
帝の第一等側役。同側役。同第三車はハ。中宮の
侍女一人。親衛。都指揮使。マルシヤル。太子の侍
中宮附屬アシユダントゼ子ラール。同第四車。
陸軍總督。側役の頭。狩人の頭。禮式長官。同五車。

フランススロチタルダ。同マルチタルダ。其右側は。
フランスナポレオンの馬役。左側は槍隊のカ
ポティン前は。六人の槍士是より從第六車は。ハ
馬は駕して。國帝后妃太子及。フランスナポレ
オン。其側は。馬役の頭。帝家の第一等馬役。百人
組の頭。砲兵の士官。帝家の馬役左側はハ。帝家
のエートデカン。中宮の第一等馬役。太子の。
エートデカン。砲兵の士官。太子の馬役。帝家の百
人組。二隊。親衛。騎兵。一エスカドロ。一ペロト
ン宛。縦隊にて之を送り。右の同勢。時計門よ

りチユイロリイの庭前。ユシユルドの廣小路
 カンゼリゼー通よりアングストリー宮へ入
 まり○ガルドナシヨナル及ガルドアンペリ
 アルといへる兵隊兩側を列して警備。嚴を極
 めり○博覽會。亞惣裁。ニストルデタ始。諸
 掛り役く。是を接し招待されり。公子公女。其
 外ハ已に各其坐に就て在り。帝其座に就んと
 する時。諸人。皆山呼してその壽を祝し。千二百
 人の樂工。帝德を頌せる樂を奏せり。帝二時半
 には就り。右にある者ハ。オットマン帝。シ

ユルタンアブレユルアチユスカン殿下。英國
 太子。荷蘭太子。ルクセンの太子。法國太子。魯國
 の公主。意大利第二王子。英國第二王子。フラン
 セスマチルダ。フランストテツキ。后妃の左に
 ハ。字國太子。サクセン太子の妃。意大利太子。都
 兒格太子。メヘムットムラットエフハアン
 デー。フランススコロキルド。意大利第二王子。
 の妃。チユクドリフタンベルリ。フランスナポ
 レオン。フランスヘルマントサクセン。都兒格
 の第二王子。アブレユルアミット。國帝。后妃の

後よりハ都兒格シユルタンの子。ユーソフイセ
チンエフ、アング。ソナルテスアンペリア
ルフランストクガワ。ソナルテスアンペリ
アルルシヤンミラ。フランスミヤンミラ。フ
ランスジョアキンミラ。及妃。同フランススジ
エーミラ。同フランスナホレオンホナバルテ。
フランスアシルミラ。亦其後ハ帝家の貴官。宮
殿のアダユダントセ子ラル。帝家のヒート
デガン。帝家の士官。及其夫人。シユルタシ附の
士官。外國の公子公主ハ附る。士官なり○帝

家の博覽會。副總裁。ソンキヒランスマツ
シユルルイエ。次申狀を讀上げり。曰今日の
礼式より。帝側ハ侍一給ふ。太子の總裁一給
ふべき。職掌ハ。陛下よりの委任を受け。其事務
を取行ふ。その趣意を。聊此ハ説明。又其為
ハ。諸人の勉強せしむ。並ハ此會の模様。及成功
を上陳せん。とモ。其事ハ付てハ。是より種々の
故障ハ少く。先シヤハデマールの地ハ建
物築立。十五ハクタメートルのルハクタメ
ートル。我三十三ハクタメートル。大夏を
メー。即八百二十五間。ハクタメートル。

造築。展陳せる。產物。種類を區別せらる。衆多
の物產。及國民の爲め各其所産を。満足せし
むべし。然し其間。僅に數月間のとなり。此度の
博覽會は。これを以前の物に比せれば。廣大な
る。設るるは。言語を用ひて。幾く計數の字を擧
ぐる。解るるなるべし。○千八百五十五年の
會は。建物園を華美にして。十五ヘクタメ
ートルなり。同六十二年は。十二ヘクタメ
ートル半。今茲六十七年より并て。四十ヘクタ
メートル余にして。その三分一の建物なり。○

千八百五十五年の會は。品物を出せし人數は
二万二千人六十二年は。二万八千人。今茲は
六万人に及ぶ。且產物の量は。二万八千噸は
二百七十噸下らる。如斯く衆多の品物を速妙に
これを陳列せしを得し。他なし。此會の爲め。
歐洲大地は。蒸氣車。鉄軌を。新營し其交際を便
利せしよれり。○器械を運動せしる爲め。
設る所の氣力。八千馬力に及ぶ。如此大業を。僅
の日月の中は。爲めし幸にして其功を奏せり。
就ては。此國の爲めハ衆人の。譽を博くし。ま

○國帝の褒賞を預るべしと云○世人博覽會
 へ付てハ。萬國の品物を比較し。學術を進步の
 輔けとせんと驚くべし○已前の會ハ。圖画
 及工作農具等を區別せしむとも。此度ハ却
 て是を一所に陳列せり。此蓋其術を見るに足
 れり。博覽會の建物其事ハ。適當せる様子製造
 し。各國の産物一覽の下に瞭然と。其種品を區
 別し。且周囲の間地を以て。器械を列せる場と
 し。而も重大の力に器械。各其力を逞うして
 互に妨碍をなさんとなく。危害を生ふとなき様
 子

これを経営し。且是を覽るゝ為に。小高き所を
 作り。衆人逼りてこれを見るときも。危き處とな
 る。其功を建築家は歸せざるを得ず○此國
 人及外國人の手細工物とを見るに。其工人と。
 器械と並馳して。物を造り出をを看る。又天
 産物を見るに。各國の政府又ハ。各人の數寄
 して。取聚めざるものにて。其富を見るに足る。又
 園圃を造ふ時ハ。各國の俗習。これを掌下に見
 るべし。中庭ハ。セー又河水を引て噴水の觀
 を設け。ヒランクルの博覽を見まハ。此國は

ある。耕作の具を見るべし。陛下今茲に成功を
擧るとも。これを謙辞を用ゆるを能く給ふ
まじ。乍然帝家掛り役、其外輔佐のものなり
とも其輩のこの力にて。ちくまでよい至る
まじ。故に臣等の勤る所。但その第二等も位
をそのより。其上等なり。他人より。今爰に其謝辞
を陳せんと。外國の委任を受くる人。各其
國より秀拔なる人より。いま。各其國の爲に
力を盡し。其國の工作。其真を共に。此會
より。是皆その人々の力に依れり。まじ

し。可驚盛舉に及ぶ。又六万人の工
人預て。其功を共にせり。然れども。右様其力を
競内し。就て又。其最者を撰り。さるを得る
なり。此會掛りの者。多務なるより。是を
ユリ。アントルナショナル。萬國の際に
監督を委任せり。是は各國の物産。貿易等
明りなる人の會社なり。其人等。各其國を
思ふ心なき。あられといへとも。事皆正理
基き。私の依怙を以て。其務をなさ。其心を
て。各國の其先を競ふ意を押し。其煩を計ら

功を奏するに至りしを。今日是を陛下前謹
白^{まう}す。其褒賞を頒^{はな}つる数即ち左の次第を以^{もつ}
せり

カランプリー 大形の金の 六十四

金メタイル 八百八十三

銀メタイル 三千五百五十三

紫銅 六千五百六十五

褒詞 五千八百〇一

かゝる多数の褒賞ありといへとも。尚其實を
へきを遺^{のこ}るの多かるべし。此度新^{あらた}ま建^たる。

公監廳までも又前同様は其力を用ひたり
此廳までい。其品物を吟味するのとならば、其
家中の制度まで吟味せし事なれ。事更に鄭
重なりとせ。此廳まで頒^{はな}つるものい

ブリー 十二

褒詞 二十四

シターション 四

陛下その中の秀板なるものは、誥詞あるを
許せしより。掛り一同其謝詞^{しやくご}を述べ。又万國
の博覽會成功まつ。各國の景況^{けいけい}を爰^{こゝ}に

説き。此度の博覽會は。現今の人よて頌賛せら
る。且從世までも稱美せらるべき。世界万国
の物産。具備せざるなき故を以てなり。歐洲各
國のよならず。亜米利加。亞弗利加。極東の國々
もて其列に入り。亜米利加。合衆國。六十二年
の會は。内乱ありて。物産を出せを得ず。
六十七年の會は。交際上切要の國なれ。今
其為に十分の地をとりめり。
亜米利加の大地及。南亜米利加の國々も。各其
掛りの人々よりて。銘々の國光を輝せり。

オットマン。帝國都兒格及。亞弗利加の西北に
ある。回く教國は。その品物を送りしものなら
る。エヤムテマールの真中を抜て。家室の製と。
往古の姿とを示す。家室等を造立し大に。
我輩の眼目を開けり。如斯き。皆其君主の自
ら勉精して。此博覽會の輔佐をなせし。力に頼
まり。極東の國は。また我輩の万国博覽會。
ある事なり。今度の其地は。差遣はせし。
公使。商人。教師。學士。等の力にて。皆其列に
れるに至り。

巴社。支那。及日本國。及其附屬の國々。とも。皆我輩の化よよれり。

斯衆國民の好意を以て。此一場中。各其功を競ふ。其。數年來開化の進歩をよき年表と見倣をて。今度新なる第十種の。一類を立。齊家。使工の道を吟味せし。心學の進歩と見るべし。大人。童子の學問。其他製家の法等に至りて。人心は益あると少く。是以前の博覽會なる所より。此度新なる。建つ所なり。右は就て。褒賞を得るもの。同一工を。共にするもの。其

商社。及政府等の。世話行届けるを。賞せるものなり。故に今茲の博覽會は於て。新なる。發明せるもの。此勵となり。力を競ふ時。大業を。もなすべき理を示し。貿易の自在を。めらし。各國人民の。經濟の道を示し。量尺貨幣等一致せし。各國の都合となるべき筋を。了解せし。め。且又各國の間は。相忌相惡の。念を消し。相敬し。相愛するもの。意を生せし。め。爰は來觀するもの。此國革命の際。大亂ありしを。打忘て。即今太平の樂化盛なり。風俗美なるを。驚く。なるべし。

各國君主皇族。多此會に來りて。その樂を共
よせるより。後來に干戈の虞なく。世界太平に
歸すべきの。一徵しるしを示せり

都てうくの如きもの。皆陛下宇内の。史中一葉
を添ふべく。將千八百年代の盛典なるべし

右の申狀を讀て後。國帝左の言葉を述べり

諸君此舉に。十二年前より。已來竟に再び。國を

富ち。人生の和。人心を開き。人々の為に。褒

賞を頒つとよ及べり。古希臘ギリシヤの時。競馬の舉を

以て。極盛さいせいの事の如く。昔時。詩人の是を聲詩せいしと

サカリヲキマ

ウタヒ

播て後世に傳ふもの多かりし。今度の舉

に。全世界の人々。各々の智巧を。競ふと開化の

極致きょくちあり。よ。や至るあまのぼるも。抑其階梯きゐ

となすふ。由り。といふ趣あり。當時詩人

是を觀に。夫是を何と。いふ人。大地ちき上各

部より。九百ひやく技藝。智巧。機具を。ありを為し。競

て此國に聚會し。各君主も。亦各々の助力を。

為さん。為し。爰に來臨あり。故に此舉に。形而

下の。見るものあり。といへとも。其實

ハ形而上の理に關りて。人心の一致和平を輔

モノカタチヲササヘ

け。四海一家共々。太平の樂を饗くへき一端
なをものといふべし。萬國の民人各々、は聚
會せるより、互は相尊崇（タクトとカメ）せるをえり。互は相
忿怒（ウツミイカル）するを忘る。己の國の富盛ハ。即他國の
富盛を助くる。所謂百事の道理を弁へ。全地球
上（アルドアル）九有の物（サカシナルモノ）華天寶（コノタカラ）盡くあるは聚觀（アウケン）するとな
る。今茲千八百六十七年の博覽會ハ。實はこ
れをユニウエルセル（モロノコト）全世界は行れといふ
て不可なるべし。

新發明の物の側は、極古代の品も羅列し、華奢

一隸の物品あれい。又實際第一の器械あり。人
間九百の智巧。自ら明白なるべし。
工作の利用はおろく。今度なと心を用ひる
となし。即工人の教養、厚生、及并力、同工の趣意
ありてい。殊に意を注げる事なり
是を以て。九有の開化皆その首を齊めて進
む勢あり。學藝日新となれい。万物盡く是が
役となりて。人智使て自在を得べし。人心日
開け。鄙吝の念。漸く消て。人情益厚くより得べ
し。諸君。歐洲各國。其他の君主皆我為す。此國の

来問あり。我々榮を爲さるるを祝くせ
らるるを望む。且此國の盛大。文明。百事を。諸
人子示せし。亦諸君の爲に誇るる足るなる
べし。

如此して。猶古の國の盛大を不見。此國の開化
を鄙むものあらは。是却て。各己が國を愛せ
る念なきものといふべし。此國は近頃まで。
國內も穩ならず。或は外境までも。侵擾を
あり。今既に。太平富饒ありて。却て他國
の開化を誘ふ同く。文明の域はいかに

むと。其の爲に國人の驕くべきかと。心を用ひ
る。他の國人もこれを許さ所なり。已に本
國の爲に。その面目を存する。心を用ひ
も。是皆己を利し。人を害するの道は。知ら
いふ。聊事理を解するもの。知る所なる
べし。故に此國は。暫時も在留せる。外國人
は。此國人の。他國人の爲に。愛憎の念深く。尊敬
の意厚き。了解し得べし。朕。今我々。鑑
定の人。各その。所職を盡し。勉力たり
し。を愛し謝すべし。且年々。幼冲なるを

以てせまいて幸ふ。此盛舉は預まじ。我少子の
為。并せてこゝに謝詞を述べ。千八百六十七年
の博覽會に。万民開化の階梯とす。朕尤期を
る所として。皇天幸ふ。其運を輔け。實を永久
に保持し。國人を安寧し。人心慈愛の源を闡
ふ。道心正理の捷を報ふるに至ると。朕敢て是
に任せり

國帝この詞を伸ぶるの間。衆人稱美をり。為
に注ぐその詞中。断せり。人々亦これを聞ん
とて立上るものあり。武の副頭領ソシエキセラ

ンスモツレユールホルカード次の順序に依り
て褒賞を受ける人を呼出せり。中
ガラトプリーを得るもの。其第一はあり。レシオ
ントノール中の最たるもの。シバリエーのもの。
其次は立り。各種に分てる人々。各その頭領に導
りれて。帝坐近る進みガラントプリー。及尋常。及
最上の等にあるもの。各その賞牌を得るもの。
帝前より上行さるる

其實牌ハ別頭領ソシエキセランスマレレアー
ルウエラランより兼て帝に呈上する者なり

其他の賞牌ハ。各部の頭領より。是を領つべき旨
帝より命せられて後ハ。新建の公監所にて。与ふ
るものなりき。○佛國人の。家室建築の事よつて。
國帝ニ献せべき賞牌ハ。恰も皇子の手を経て是
を領掌あられ。其事了る後。國帝后妃。及シエ
ルタン各國公子一同。其國の部分を巡覽せる時。
博覽會總裁モツシユルプレーニストルデク。
よよりて其名を披露せり。其間樂工の頌歌と。衆
人の祝詞相響應して。どよみ夥りりりり
此礼三時四十分を以て了り。シユルタン去て後。

國帝も退去りり。其去る臨みて。一應拭りの者へ
よろしく沙汰あるべき様。ミニストルデタは。命
せられりり
右の如く各國帝王。列班嚴肅よりて天下の品物。
珍奇善美を盡し。役々鑑定批評公然と。優劣を決
判し。順次を以て。褒賞を行ふ異同甲乙ある右の
如し。其内我邦の褒賞部分各々差ありといふと。
も是を略せり
六月朔日 西洋七 晴。朝八時シベリヨン。来り商人
とも。茶店の事よよりて。談話せり

同二日 西洋三月三日 晴。午後より博覽會を観る。陪を
博覽會。褒賞本邦へケランブリイの功牌を鑑定
役書記官。シヤングルドア。シベリヨン同道より。
来り。さし出せり

同三日 西洋四月四日 小雨。無事

同四日 西洋五月五日 曇。無事

同五日 西洋六月六日 晴。夕五時。町會所より。都兒格帝の
ため。舞踏を催せり。墨是可帝。殺害に遭ひしと

聞て。佛帝遠慮あり。舞踏やとぬ。都人ライン
ラントル。交易學。政事學をもて。自薦書を出せり。

佛人の僧某の姉妹より。日本の事を著述せる書
を差出せり

同六日 西洋七月七日 晴。無事

同七日 西洋八月八日 晴。荷蘭學生等。帰國せるより来
り見ゆ。佛帝の側役バロンクルテ。旅行より来

見ゆ

同八日 西洋九月九日 晴。博覽會。コンシエールセ子ラール
プレイ。モンブランの事より。往復の書簡の

写を添て。其書簡を出せり

同九日 西洋十月十日 晴。無事

川セイヌ

同十日 西洋七月十一日 晴、午前十一時より川舟にて。セ
イヌ川を遊り。巴里郊外に遊ぶに陪を。舟のゆく
十三里程下りて。岸より。一村に落ち。あきら
く。越て。汽車にて。暮七時頃帰る。
同十一日 西洋七月十二日 小雨。佛國にニストルより。博
覧會の謝書を呈せり。荷蘭公使館附書記官より。
書冊を呈せり。
同十二日 西洋七月十三日 曇。無事。
同十三日 西洋七月十四日 曇。朝七時。土人。医師シロウド
ウの別業を看るに陪を。

博覧會新聞

同十四日 西洋七月十五日 晴。無事。
同十五日 西洋七月十六日 曇。便船に因りて。各本邦へ寄
書を。
同十六日 西洋七月十七日 曇。銃砲を試みるに陪を。
同十七日 西洋七月十八日 曇。午後一時フロリヘラルト
来る。此日。博覧會に付き。新聞を得る。
第七月十七日
博覧會中。亞細亞。亞弗利加。諸國の部を。巡行せ
へ。竟る。誇詡の私意を生ぜざる。能はれ。あつる
遠距の國々まで。此會に列する。是の國の

聲譽なるべし。全亜細亞中よりて。最金備し。
最華盛なる産物也。無論これを。日本より師を。其
産物を取聚め。又是を法國より送り。其品物
い。小箱鏡のつきさる銀。象牙細工の小家具。青
銅器。磁器。玻璃器。日本よりあり。味は稀少
して。貴人の外に。所持し得ざる。卵殻と唱ふる。
磁器銅。又い木材は鞘を製し極銀練せる刃を
蔵するもの。天然水晶より細工せる玉。日本婦
人の美麗を。想望をべき様は製せる像。其他を
べて歐羅巴洲。好事家を眩惑せざる。諸玩物家



具ともへき。蒔繪漆器。是木造の器也。恰も彫刻
せる如く高低を分ちて。画けるものにて。真
價ある物なり。其漆は漆の木といへる樹液より
て。三歳程の樹よりを以て。刻劃し。其液エラス
チツリゴム木のとく。流き出せるを。取て作り
出せるものにて。顔料具を雜へ。各種の色を
出し。是を銅板上に練りて。金銀なとをも。取交
へ画くなり。○日本人の最愛するもの。長壽の
ものと見へたり。即亀鶴松の樹なり。又意匠を
もて画き出せる。虚形の動物を愛せり。譬へ龜

の尾は濃毛を生じ。龍頭馬形よりして鹿足有。怪
獸なり。是なり。其國中は名ある富士と。帆船
と。魚の水中。潑刺さる様など。其最好にて描
く所なり。○又烟管の奇製あるも。爰は述べさ
るを得ず。其管は極て怪むべき形を彫鏤せる
木。まじり。牙にて製せるものあり。是を飾れり。
此物ハ。日本に在りてハ。男子の佩具中にて。最
缺くべからざるものなり。蓋絹製の紐を以て
是を。衣服の扣鈕に附てこれを佩ふ。其管ハ。蘆
管よりして。其雁首ハ。小青銅を用ふ。僅は火を保

つゝは是なる。故に。是を吸ふハ。指頭を以て。烟

豆大に捏ヒナリして。これを管頭は盛るゆへに。唯一

吹よりして。熄ヒナリず。是を以て。日本の烟客ハ往々曰

は百管を吸ふものあり。烟草ハ黄色よりして。都

児格の産のものに似たり。是を刻むと。細糸の

如く。其香。人を以て悦ヒナリむべし。其上品ハ薩摩

又長崎に産せり

同十八日 西洋七月 雨。公使より。教師の事を。國帝

は頼み。遣はされしより。國帝陸軍と。ストル

へ命し。陸軍士官の内を撰み。教師として。傳カシツキせん

獨樂

とて。其次第を言ひ越されあり

同十九日 西洋七月 曇。本邦。曲藝松井源水等。来り

此都より。伎藝をなせり。催主。英國カビラインよ
り招待より。夜之を看る小陪せり

同廿日 西洋七月 晴。無事

同廿一日 西洋七月 晴。朝十時より。又博覧會を看

る小陪。本邦商人の出せり。茶店へ休憩を。此日。
ヒガロ。新聞を得たり

第七月二十二日

日本の手品遣ひの。一組今度テヤトルデユ

フランスアマペリヤルは出張せる。其評判

は。現今米利堅にある。一組の。最有名なるより

従て。其名を得るものなる。然れども。源

水の族の獨樂の藝は。於ては。驚くべき力なり

といふ。へうなり。又魔法を以て。蝶を使用を

する。有名なるアサキチも。称を。とせ。又亀吉。

小瀧。タラキチも。又頗る感をも。余謂らく。渠

輩の場は上なり。大君の軍を御せると同く。

兵を練る。士官に餘り。多弁なるを好まぬ。我

輩。議事官に在る。非なり。又用意遅緩ふ

して人是不快を抱く。一むるとなくべ。一個の
よき見物なるべし。又獨樂を廻て坐。低き所よ
りて、衆人僅にこれを見るを得。又ハ見る能
はざる程なれど。是を一害とせ。○法國人の物
は堪ゆるをなく。又外國人を敬まるとなき性
質なれハ其伎を譽むるものなきは知らされ
ども。亦これ辱しめて。閉口せしむるは過れり。
男子婦人小兒輩の一组一列は。羅坐して。前面
にある。其國の人々も向ひ禮をなせり。其時。ア
サキチの口上ハ衆人は對せるまや。又神明を

手品

祝せるまや。我輩固より。其語を解せし。且縦ひ
是を學ぶまも。深く其曲折を。盡く能くさるべ
し。○手品の仕方ハ。いづれも奇麗なり。其
為を所衆人の目ハ觸る。様なり。是更ハ狭き
座敷に於て。是を旋て。適てべし。○アサキチ。
盃中ハ水を盛り。是を倒し。其下ハ敷ける。白紙
の中より画たる紙を引出せし業ハ。正なりと
いへども。之を見るもの。少々なり。○紙の紐二
重箱の伎ハ。未熟といふべし。衆人側より撒
きちらし。紙は属目せる間は。傘中ハ於て虎の

形は変へ其態を學ひて。小兒を師をよ。事
足るべし。○獨樂は伎ハ。人の意量の外は出つ
空中に擲ち。これを竹竿の頭は受取り。直上の
繩扇の紙の縁。及刃の上は渡りてむる事。且村
舎の景色。即橋梁。道途。社寺等。獨樂の歴訪を
る様をなすなど。頗る新奇にして。驚くべしと
いへとも。口上もなく。音樂もなく。且駿速はこ
れをなすべし。尔時其村舎は。招待ありて。獨樂
中途は駐りたり。ハ日本人のソルノエリ
意太。利東國と戦
争あり。地名といふも可なり。○輕業の方

ハ。極て人を怕れし。ハ一人足を以て。舞臺は倒
懸し手を以て。一の両長竿を附する。三角形の
物を持する。他の日本人。手或ハ。足を以て。其竿
は容易に身を置き。又其竿ををべりて止り木
に止りたり。其間凡二十分時程ハ。半愛半怕の
両態をちしてとれを見せたり。法人も此の
如き伎をなさば。人皆めんどてとれを見さる
へし。されとも。日本人なれハ十分は是を恐れ
さるなり。我背後に在て見物せし小兒。其母は
問ふて。渠も落るとりやといふ。ハ。只毀

損をべーと答へたり。是日本人を磁器漆器と
同視せるなるべー

曲馬。又ハ紙圈を蹴脱曲馬中の一伎なりハ

ハ種々の戯劇きげきなりて。衆人の心俘立たる

後。是を半場はんばうをなす方。人意いぎハ適てききハ

同廿二日西洋七月二十三日曇。午後一時。公使。帝宮へゆく。

折節ハルトガ葡萄酒王妃ハルトガハ面會セリ何を著そ此日カリ

葡萄酒王妃

ナニ新聞を得たり

第七月二十三日日本の向記

日本人の心術行事を就て。東洋よりて。一議
論起れり。先年初て日本と貿易りを開ひらく。外國
人の。日本習俗を論をするも。説をハ。日本人
ハ平生。心術所行をといふものなく。只淫樂を耽
るを事をと見るのみなりとせり。其譯ハ彼國茶
肆の模様を以て考證セリ

先年シルルセルホルトアルユツク。日
本の内部を旅行セし時。茶肆の制。宜なりうりさ
るを見て。其流弊を忍れ。茶肆の外ハ好旅舎の
なりりもこれ泊をるを嫌ひ。別は旅宿を

設けらるゝとを請ふといへり
又支那上海より。曾而寧波の教士として。現
は東印度電信社の佐る。米人ドクトルマク
ゴウアと前の説を主張して。亜細亞學會の坐
は於て。日本人の懶惰。淫逸よりして。汚俗なるとを
以て。其性情も目より下り。其人口も年々減る
きよりを述る。然る小。近來其説蔓延して。竟
は上海に刊行せる。支那文の新聞紙に載る
を以て。漢字を解する。日本人。支那古文字にて。
其取詞を書せり

俠勇の氣を具へる。日本兒其挟む所の長刀
よかえて。筆を以て議論するを始るとい。最
好む所なり。といへとも。其筆を用るとも。其終
儀の氣味あるとを舍めり。又驚くへいと云。
其ドクトルマクゴウアと反せる説に云。是
日本形勢を悉さず。妄り如斯説をなす。若
其人曰。日本より日本。の少年勇壯の輩。皆兵
器を携へて。是を撃んと計るへいといへり。然
るは双方とも。仔細は其理を説き及ばざり
ハ遺憾なり。マリゴアの説に。國內の人口。歐

洲人の考る所の。其實を浮き。其實は僅に千
六百万に過ぎ。古い頗る多かりしが今ハ稍減
少せんとす。其故ハ其俗の淫靡なるよりと
いへるを述べるのとなり。是は反して日本
人の自ら述べる所にてハ、千六万にまで置五千
万に幾く。其地殖せる處計るべしとぞ。ドク
トルマクゴウアの説も全く偽なりとす。ト
といへとも。日本の男子ハ身体強壯にして。能
其事を勤め。其婦女ハ病なく血氣美なりとの
事ハ。凡其地は撰むるもの皆説く所なり。トク

トルマクゴウアの説ハ。全く是は反せり。近
來日本人西洋の發明を假用ゆるといふに力
を盡し。其知能事實を見ざるを以て。既ち千
八百五十九年港を開けしより。以來日本政府
及大名等より買米せし。歐洲風の船八十艘。蒸
氣船其數多かり。且其蒸氣船上ハ。士官水夫
とも。全く日本人のよりし。能く之を使用せ
り。或諸侯のよりし。軍務貿易の爲め十七艘
の蒸氣船を買入たり。政府よりハ。今現に買入
たる船のよりし。未だ知られず。更ハ歐洲

及米利堅へモニトル。及装鉄船の數多を。訛
 り。今もて買入る船の價。是は可トルラル七
 百五十万余。即大凡百二十万ポントスデルリ
 ング計を費したる。是は因てこれを觀れ。日
 本は近く衰弱をへき人種。非を曾て航海
 を好むる時。支那及無來由の海岸。加之遠く
 印度海太平洋を越え。米利堅の。西岸より達
 セー古俗は復し。前ひ盛んなるべきを徴せり。
 又日本人長崎に於て。其蒸氣船を修復をへき
 爲め。大費を不厭。工場を築造せり。

同廿三日	西洋七月十四日	雨。無事
同廿四日	西洋七月十五日	曇。無事
同廿五日	西洋七月十六日	雨。試砲あり
同廿六日	西洋七月十七日	霽。無事
同廿七日	西洋七月十八日	晴。英人附添て。本邦藝人等來
同廿八日	西洋七月十九日	晴。國帝の選舉よて。公使留學
中の傳役	西洋七月二十日	晴。本邦。足藝演鑑定吉。米利堅
同廿九日	西洋七月二十一日	晴。本邦。足藝演鑑定吉。米利堅
國より。當都へ來り。伎藝を催せり。座元へシクス		

ヒガロ
新聞

船中日記

七月朔日

廿一

といふものより招待ふよりて。これを看子陪を

七月朔日 西洋七月十一日 晴無事

同二日 西洋八月一日 晴。今日より傳者コロ子ル。来り相

語る。夕四時同人并フロリヘラルト。クレイ。ジユ

レー。カシヨン。タエルベ。等へ夜饌を具せ。此日ヒ

ガロ新聞を得たり

第七月三十一日

昨夜シルクナボレオンは於て伎を呈せし。新

来の日本曲藝者の一組は。疑もなく。政府御用

を勤る者なり。アメリカンもある。曲伎者ハ。曾

て寵を蒙り。今ハ既ニ黙けられざるもの。新榮

のもの。抵抗せんとする如し

新来の一組ハ。先ヨ来れる者よりハ。更ニ巧み

且身體の自由なるを殊ニ優れり

此曲藝師の日本政府の御用を勤るその證ハ

當時巴里ニ在留せる公使見物の席ニて。吝惜

の色なく。二千五百フランクの金を賜りし。よ

て。明らかなりといふべし

リユリボウといへる。國帝其執政を撰む。長

き棒を建て。人を立て。これハ攀ら。めたりと

航西日記

卷之四

廿一

の古き説あり。も一其人をして昨夜此シルク
より一ゆハ。直に此經世學者を曲伎者を擧て。
是を執政の長となすべし。併りユリボウ國は
てかくまで是を登庸するとも只其伎藝の巧
くなる。平準を能くすると。物より怖るゝとな
き徳を称するのよて。いまは足る。其職
を盡す泰然なる様も最稱すべきなるべし。
我輩即歐洲の曲伎者ハ。其伎藝を務るゝ。金
銀なとよて装ふ事多し。然るに日本人ハ只氣
車輓路の番人の如き衣服を着るゝれども。有

名のレオタルトハ。國政を議する時よりも更
は淵穆沈重の姿あり。○其伎を呈する前ハ。脊
髓の地は傾くみと。ハルベフリウのボペスリ
國をして。心酔せしむるは。○其なを厭シ
ルクアメリカは。同しといへとも。そ
の所為。更は多し。我輩をして。議院より。そ
き想をなさしむるを。蓋我輩解し得
るといへとも。噴く語看者ハ。厭惡を生ぜし
むるをなく。全く其伎をなほものを。勵ましむ
るまで。用ふるものなり。此戲場は在りてを

兒童輩。尤その上乗なり。就中オリライトといへる小童最も勝れり。其容貌頗る美艷愛をへく。其身を獨樂のとり廻し。素足よて。撓ゆる竹より。からみり。足を以て。盤を廻るをこと。これ階子。又獨樂の旅行オリライトの肩の上にとまる業など。最新奇の伎なり。且一つの仕をこなひもなく。衆人いさく是を称せり。故に其公使より賜ふ所も衆人感称する處の意に比されい。いま十分といひり。此度の博覽會よりて。諸國帝王も來會し。平和の會

儀樂工の合奏。製樂者の會論り。上を世界五洲より。曲伎者の會聚するとなき理なり。此度の曲戲よりて。只娛樂のとならば。體術を以て交際の道は。平準の方。國民經濟の上は。用ひ。獨樂を使ふ。為めは。長刀を抜く。機合。辨口の流る。り如き。議政官の棟なるなど。是開化の進歩を翼る姿なりといふべし。

同三日 西洋八月二日 晴。朝カシヨン來て。其著述の書を献る。

同四日 西洋八月三日 曇。朝八時。瑞西ミーストルレレ

雜報

イ来る。此日新聞を得たり

千八百六十七年第八月二日

雜報

日本戲場

殆んど。一月前、二君子ありて、我家に來り、其名
刺と。一幅の紙とを出せり、我その幅を開看せ
し。藍色よりて、中は一男子の面を。天は朝
せしやうる姿を画き、その一足の上は、驚く
べき。高竹を豎て其竿頭は、黄色の豹に類せる
ものなり。我其來賓は、其圖の意を問
はし。兩君子の。一モツシユルウエランといふ人

法語を以て。只英語を解する。モツシユールマ
キールを引合せし。其人は則巴里に來りて
日本の曲技を奏する人の世話人なるよしを。
自らり述、其曲技者へ。必其功を成さへき。見込
を以て。一宵千フランの價を以て。シルク
テナホレオンの座を借切し。尤その曲技者。
八日の内は到着をへし。但今日ハ一日の誤
を正さんことを望むとあり。來れるといへり。
我因て其正すべき條を問ひし。此雜報中
新約基の新報は據て。日本の曲技者の。隨一な

るもの趾を怪我せし由を載れり。其事を
大に實を失へり。尤其伎を為す。小童高處より
落る。と云ふとも。今其痛む所。既に愈て其
伎を奏する。妨なすといえり。爾時其持越し
る。黄藍一色の引札をも見り。いづれ
も珍らしく覺えり。即時其詞は随て。雜報を
改正せり。○諸新報家。日本。曲伎者の来るべ
きを述へ。又諸方の。壁上は引札を張る。折柄日
本の第二の曲伎者。其名を盗んて。シルクジ
ュ
フランスアンペリアルは出たり。然るに。竟に

マキールウエランの世話にて。黄色の人を載
る船。海神の助けを以て。此地に來着る。及
べり。○火曜日。シルクナボレオン。シル
クジュフランスアンペリアルと同一く。燈を
点し。看者をして。兩曲伎者。優劣を定むるを
得るに至り。○月曜日の朝。此マキールウエ
ラン。兩君より新名刺。及青色の紙上は人形を
繪き。引札を受取り。此兩君より。其夕の
招待を受たり。其家に至り。入口より。廊下を過
りて。明るき場所に至りて。自在に椅子を擇む。

を得たり。是より於て日本人の一组、舞臺へ出て、
手をつき、頭を垂て衆人に向ひ。一礼をなせり。
其人々い。皆此頂上を剃り、其髪を巧に疊み上
け。頂上は墨を以て画ける如く横へり。
髪色、青黒、顔色、黄よりて、眼中は安祥、且聰明な
る相を顯はせり。鶯色よて、縞ある羽織を以て、
身の上部を掩ひ、衣服は潤き袖あるものを着
せり。一礼畢て、衆人立上りたる時、頭取と船が
りきもの、短き口上を述べ、れども、一語も解を
るゝみとを得ざりき。尔時、兩小童は指示して、其

身を輪轉せしめ、他の日本人、柏子木を打り、
これに其戯の勤めをなさざる者なり。樂工は
いつも舞馬を娛むる。為の調子よて是を勤
めたり。此伎の内、三戯尤驚くは堪へり。第一は
父の名を演説サダキチといへる。子息は三キ
チといへるもの。此内の撰なり。此サダキチの
肩の上は十五フート、九一丈五尺の長さある
直竹竿を竖る。半とニユト間よりて、其長竿
平準を得るを待て。三キチ直に其上に登る。
其頂上に至る時、竹竿曲繞して、既に見る者を

て。殆落んとするものと疑をいむる程なる
は。其下より父。其肩を上下して。其平準を保
ち竹竿再ひ。其平を得るに至る。其童子得意の
聲を發しなうら。或は足のきみて。其身を保ち。
又手のきみても保てり。又風身のきくも。身を
廻轉せり。第二に定吉臥褥上より仰臥し。其両足
を天より向け。其足上より大階子を安置し。三キチ。
又其上より攀ち十分の高さに至り。彼扇を以て
き居るとき。下よりゆきの。階子の片方の螺旋
をもつて。是を去るは。彼猶その一端の頂上

より降りて。旧より依りて扇を使ひ居り。第三に。
其父は毎より仰臥して。是上より一の大桶を置き
小童其上より登るその仕方。人智外より出く。い
はも安祥鎮重なるうゆへ。頃轉の患なく。猶
又許多の小桶をも。重み得るなり。最後より小童
桶より。製せるピラント上より在るとき。其父を
の片足を引て。動揺せしむるとき。恰の頃扇を
へき想なれども。小童自若として。沸るとき休
みて扇を使ひ居れり。其舉止いりより。寧靜閑
雅より。餘地あり。他の人より。盡く舞臺の上

よりりて。彼小童の聲を幾ぞ毎に是に應ふ。
サダキケハ扇を使ひ。世話人の柏子木を打。見
るよ人目を駭く。此一區の曲伎場より
て。數千里外に遊ぶ想を起さしめ。金飾の衣
服を。著し王椅に坐し給ふ。大君も爰に臨み給
へる也と。探望する情を幾ぞよする。隅田川
松五郎そこし長過る名なれとし。是又日本中
の驚くべき一人物なり。此者ハ天井より竹竿
をつる。宛し舞臺の中間より。隅田川の
竿の端より。一人其端を把り。其竿を上りて。

其身を平準に保ち。急ぎ手を放して其竿を滑
下す。其速なるを驚くべき程なり。若地は
墜るより。其頭顱に打毀すべき位なるを。
忽ち巧きは其下端に至りて止まり。數に其身
を上下せり
以上の曲伎。皆看者は思胎を懷らしめ。踊み
繼て。獨樂また一の松井菊次郎。一策口を開く
へき伎を呈せり。此者妙は。一小獨樂の繩をま
き附け。其身を轉る。いづる。獨樂を空中に
擲ち。まゝ手は戻し。腕より肩をつ。いづる。服

腹より足と及ひ。おと再ひもとの道を戻ると
皆其身を轉^く振^れいて。其獨樂の游行をるを得
せしむるものなり。又渠その獨樂を。半端は廻
らしめ。又刀刃上を傳^ついしめなとせ。其終りよ
獨樂敷いて。おとあらば。日本人皆樂屋に入ら
といへとも猶自ら。舞臺上よまをり居たり
右様都ての伎を見る内。相子木の合圖何を為
せしめなりや知得されい。其事を問ふ為め。舞
臺の後口よいさう。ウエラン君よ尋ねたり
よ知らさるよ。マキール君と呼び英語

をもて是を問ひしは答ふは。サタキチは問
ふへいと云つ。日本人の坐敷は聚^あ居^りせる處
まいり。空中は指示し種々の手真似はて。我
新聞紙を記せるものなるを示し。さうし
サダキチ我^{われ}傍^{そば}より来り。手を振うてフランスと
の一語をいし出せり。又圓月の如き顔色なる
小童礼をなす。及兩婦人の咲^{さき}を含めて立て礼
し。其他の人とも。皆種々の仕方あり。一礼を伸^の
たり

シルリナボレランは。曲伎者の。重立たる

ものなるより。其もののハ。格別ニ身を傾けて礼
を為さず。そもはやく着い多く身を傾け。其下
に至りてハ盡く身を俯しなり。封建の制度の
る日本の國俗ハシルクの物なりと云。其身
分の位階を守ると見へたり
中入りの節。日本人。食を喫るを折られハ。幸ひ
よこれをも觀よりハ。飯臺の上ハ小菓子。及
乾饅頭を盛る大皿なり。日本の女子男子。打
交りて。是を食する。頗遠はせを時々水を飲
み又乾饅頭を食する。其伎備を旋るよりよく

優游餘地なり。其眼光黒くして。安祥伶俐の相
ありとも。我輩より。是を羨なりとい云うより
是其身体短小。且其手と同じく用をなす。足の
形頗る宜しうなり。唇翻りて面の遍乎なるを。
人種は固有なる。校僧刻薄の相をありハ故
なり。やうて日本人とも菓子喫るを為す。又
我輩を顧みざるより。我輩却て。其傍に安坐
して許し是を見ざるを得たり。其短小の身材。廣
闊の衣袖。褐色の頭顱。真に我輩をして巴里に
ありて。數千里外に身を置くの想をなせしむ。

冬時ハシベリヤのどく寒く。又夏時ハセ子が
ルの如く暑き。一稀^{マレ}有^{ケル}の國土のとよおるて今
爰ハ一夢想となき

尔時マキール君の爲ハ提^{ヒキ}擧^ケせられて曰く。彼
世話人の敲く柏子木ハ。人ハ注意セしむる爲
の用をなきものにて。衆看者の爲ハ。敲くこの
よりよて其響ハ。此次ハ出せるものハ。先のも
のより更ハ勝れともし。殊ハ注目せよとの意
を表さる也。いへる折柄。恰も其響を聞けり
ハ。我隅田川松五郎と。松井菊次郎と。幾千歳の

繁昌を祝する詞を述て。もとの棧敷ハ戻りき

日本の家屋

トシ子ールビヨン

現今。日本の家屋ハ博覽會中。珍物の随一たり。
此家ハパルク^{地園}の内よて。支那^{支那}地所ハ隣り
す。初メ日本よりハ組立也。持越一此地よて
結構せり。總て日本の家屋皆うくのことい
ふハ。何れにせよ。小商人の住家及茶肆の
雛形を示せるものなり。其茶肆といへるもの
ハ。往來の傍におゐて。過客の爲煮る魚肉よ

米飯を雜へるもの。及日本にて尤貴ふ所の
米より製作せる。酒等を饗するものなり。種々
は彩色せる。紙の提灯を檐に遠らし。小池など
の傍に蛇蛭せり。其周圍に松の薄板を竹に取
付て。頗る高き屏障となせり。格別堅牢ならざ
る故に。盜賊を防ぐに用をなさず。只人の見遠
くをを防ぐのなるべし。入口の門を入て。尤
人目を駭く走へきものなり。四本柱に立つるされ
る釣鐘なり。且繩をもて。一の木根長さ一メ
ートル半周經十五。乃至二十センチメートル

ものなるべきものを水準につるし。これを鐘に
撞つて。聲を發せしむるものなり。日本の家
屋に。総て水を以て造れるより。火災敷く起
れるものなり。如此釣鐘は何處の場所にも是
を設け置。火災起れる時にこれを去らるもの
なるより也。家屋も圓塀と同じく盡く木を以
て製造せり。松の薄板を竹に取附け上ハ葉を
もて葺く。家ハ兩廂に分ち中は廊を設け。入
口の方ハ飯臺を設て茶酒を客に供する為に
を興の方より。三少婦人のおもむき。おね。おさ

と、いへるものなり。或ハ獨樂のときものを
 弄^{もてあそ}ひ。又ハ其國体に従ひて。小管を以て烟を吹
 き^ひ辛^{から}いて日消せる様なり。其管ハ烟草一指^{ひとさし}
 又過さに。纔^{さう}一吹いて盡るより數度これ
 をつきりへて吹るなり。此家より最見ものとな
 るハ。庭の端に一廬^ふを設け。其國俗種くの人形
 を列せるなり。右ハ日本の貧賤なるものより。
 貴富の者まで。各種の俗を示せるものなり。其
 人形を見。又ハ家の後ろは羅^らねる日用雜品
 の賣物と見む。一時間よして。此^この苦勞^{くるわう}もなく

遠く日本は旅するものといふとも可なり
 同五日 西洋八月四日 曇。朝八時半。瑞西^{スイツ}とニストルロレ
 に来る

明治四辛未冬發兌

耐寒同社藏

須原屋茂兵衛

賣弘書肆

山城屋佐兵衛

和泉屋市兵衛

